

さいがいじ じょうほうしゅだん  
災害時の情報手段

わたしたちはふだん、テレビやインターネットなどのメディアから様々な情報を得て生活に役立てています。しかし、大きな災害が起こると、ふだんどおりに情報を得ることができなくなります。緊急時に役立つメディアとは、どのようなものでしょうか。災害時に情報を得る手段について、考えてみましょう。

1 東日本大震災の発生直後に人々が求めた情報



東日本大震災が発生したのは、午後2時46分でした。まだ、職場や学校にいる人が多く、家族がばらばらになっていたため、「家族の無事を確かめたい。」というのが、人々の願いでした。

しかし、停電や電話をかける人が集中したことで、多くの電話がつながらなくなりました。このような状況の中、情報を得る手段となったのは、人から人への口伝えや張り紙などでした。家族の無事を確認するために、直接避難所を訪ね歩く人も数多くいました。



避難所の伝言板

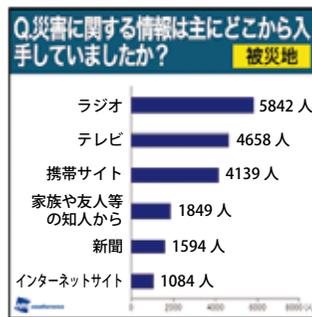
2 避難生活と情報の入手



避難生活が始まると、「食料の調達」「給水」「電気の復旧」「交通」など、生活に必要な情報が手に入らないことがなやみとなりました。

電気が復旧せず、テレビやインターネットから情報を得ることが難しい地域が多い中、役立ったものの一つがラジオです。持ち運びが簡単にでき、電池があれば聞けるので、災害情報を入手しやすかったからです。

また、携帯電話やスマートフォンへの充電が



情報を手に入れた方法 (ウェザーニューズ提供)

できるようになると、インターネットを活用して個人が情報を発信し、みんなで共有する仕組み（SNS：フェイスブック・ツイッター・ラインなどのソーシャルネットワーキングサービス）を利用する人が増えました。

◆災害用伝言ダイヤル（171）

災害時には、たくさんの人たちが電話を利用するために、電話がつながりにくくなります。そのようなとき、家族の安全を確認するには、災害用伝言ダイヤルが便利です。

◆災害用伝言板

携帯電話会社による、大規模な災害時に携帯電話やスマートフォンで安否確認ができるシステムです。家族で確認してみるのもよいでしょう。

? 考えよう

○災害発生からの期間や住んでいる場所によって、必要な情報にはちがひがあります。どんなときに、どんな手段で情報を得るとよいのか、震災のときの様子を家族や地域の人に聞いて調べてみましょう。

「震災を忘れない」それは伝え続けること

仙台放送 アナウンサー 寺田 早輪子



東日本大震災のとき、私が最初に取材に入ったのは津波に襲われた女川町でした。がれきでうめつくされ、元の美しい風景がごとごとく破壊された街を見て、「一体、私に何ができるのか・・・」と取材マイクを持ったまま立ちつくしてしまいました。しかし、「仙台放送」の腕章を見て、町の人々が、次々と、私に話しかけてきたのです。「食料も、薬も、灯油ももう底をつく。この惨状を全国に伝えて。」被災地では今、どんな助けを求めているのか。甚大な被害を受けた街で取材する意味がはっきり見えた瞬間でした。

あれから月日がたち、東日本大震災を伝えるテレビ報道の役割も変わりました。一つは、災害時にどう命を守るか、「震災の教訓」を伝える続けること。そして、もう一つは「命の大切さ」を伝え続けること。多くの人がいなくなり、行方不明となった東日本大震災。全世界が命の大切さを痛感したにも関わらず、痛ましい事件事故が絶えません。生きてくても生きられなかった多くの命があることを伝え続けることが「震災を忘れない」ことなのです。